学校現場レポート

工業高校における家庭科教育

大分県立大分工業高等学校　教諭　萱島　佳代子

ゼロからのスタート

今まで女子のみ必修だった家庭科を男子も学ぶようになって5年が経過した。私の勤務する工業高校は、ほとんどが男子生徒で、既存の施設・設備もなく家庭科棟の建設を待って、家庭科元年はまさしく何もかもがゼロからのスタートであった。

授業に先立って、男子生徒に家庭科についてのイメージテストを行った。家庭科というと…という問いかけの文に続く言葉として「料理」をあげている生徒がほとんどであり、衣食住とか生活をトータルに学ぶと答えている生徒は僅かであった。また、女子にとっての家庭科は…「とても重要で大切なこと」だが、男子にとっての家庭科は…「これからは必要になってくるだろう」とか、「やっておいた方がよい」などという答えが大半であった。高校で家庭科を学ぶことについては…「大賛成!」「嬉しい!」「頑張る!」と大半の生徒が答えている。つまり、家事は元来女の仕事であるという伝統的性別役割分業観を持つものの、これから家庭科を学ぶことについての抵抗感はなく前向きに受け止めているといえる。

男子生徒相手に試行錯誤の日々

社会の変化の中で、家庭科は、主婦になるための準備教育ではなく、男女が共に生きるという視点で自立した生活者を育てる教育に変わった。単に将来家庭を持ったときに役立つ家事についての技術を習得させるのではなく、生活者として自立を促す授業づくりに努めてきた。生活経験の乏しい彼らを相手に、教室に実物を持ち込んだり、視聴覚機器の活用や実験・実習を多く取り入れ体験的に学習させるなど生徒にとって分かりやすく楽しい授業を心がけた。

「食」の分野、とりわけ調理実習に際だった興味・関心を持っている彼らではあるが、女子のみの授業では概ねおとなしく聞いて理解してくれていたことでも、男子だけが相手となるとそうはいかず、「おもしろくねえー」「実習はいつするん」とうるさく、机に伏してしまう生徒も出てくる。手順を細かく書いた調理カードは見るのを面倒くさがり、一つ一つ尋ねてくる。また、「食べる」以外の作業、特に盛りつけや配膳・片づけを面倒くさがる。腕力があり扱いが粗雑なために、食器・器具や戸棚などの破損や故障状況がひどい。しかし、新鮮な感覚で家庭科の授業を受ける男子生徒から、食品の性質や調理現象を科学的に捉えた質問がよく出されるという実態もあり、食品の栄養的な特質や調理性を理解させ、総合的・科学的に調理することを学ぶ良い機会であると考え、実験を多く導入し、生徒に意外性や発見的喜びを感得させ、実習につなげるなど、男子の実態にあわせた工夫をした。生徒の感想では「食物の授業を通して、自分がどれだけ無知で家庭科の授業がどれだけこの先必要になってくるか身にしみて分かりました。実験や実習を通して、食べ物に対する見方が変わりました。今まではただ食べるだけでしたが、食塩や砂糖の摂取についてや加工食品の原材料にも気を配るようになったし、一日30食品がとれるように心がけたり…。体の健康を保つためには、理論を踏まえてこういう勉強を真面目にすることが大切だと思うようになった。」など、食生活に対する意識や行動の変化が見られた。

男女共生社会の実現に向けて

また、印象に残ったテーマとして、「保育」領域の学習をあげ、卒業後の自分の生き方に影響する大切な内容だと感じている生徒も多い。「生命の尊さを考えさせられたし、健康で元気な赤ちゃんを産んで育てるには男の人の手助けがいかに大切かが理解できた。パートナーが妊娠したら精一杯協力したいと思う。」「正直言って今までは、自分が男だからそれほど考えていなかったけど、子育ては、女性だけがするものではなく、男女が助け合ってするものだと実感した。僕もあと何年かして結婚し、今度は自分が父親になった時には、生まれる前からお腹の赤ちゃんに語りかけたり、家事をすすんで手伝ったりしたい。」卒業を目前にした生徒の感想は素直である。家庭科が男女必修になった経緯からしても、「青年期の生き方」や「愛と性」、「親となる教育」などを中心としたこの領域は、「家族」の領域とともに新しい時代の家庭科教育の中核となる領域ではないかと思う。十代の柔軟な頭脳を持つ男子生徒がこの内容を楽しく学び、支え合って生きることの大切さを感じ取り、人生をより豊かに生きる力につなげることができればと願っている。

少々手はかかるものの、驚きや喜びを素直に表現する本校の気のいい生徒たち、反応がストレートに伝わってくる分緊張感もあり、やりがいもある。今後も、彼らの青年期の生き方やこれからの男女共生社会の実現につながる教材の精選や指導法の工夫をしていきたい。